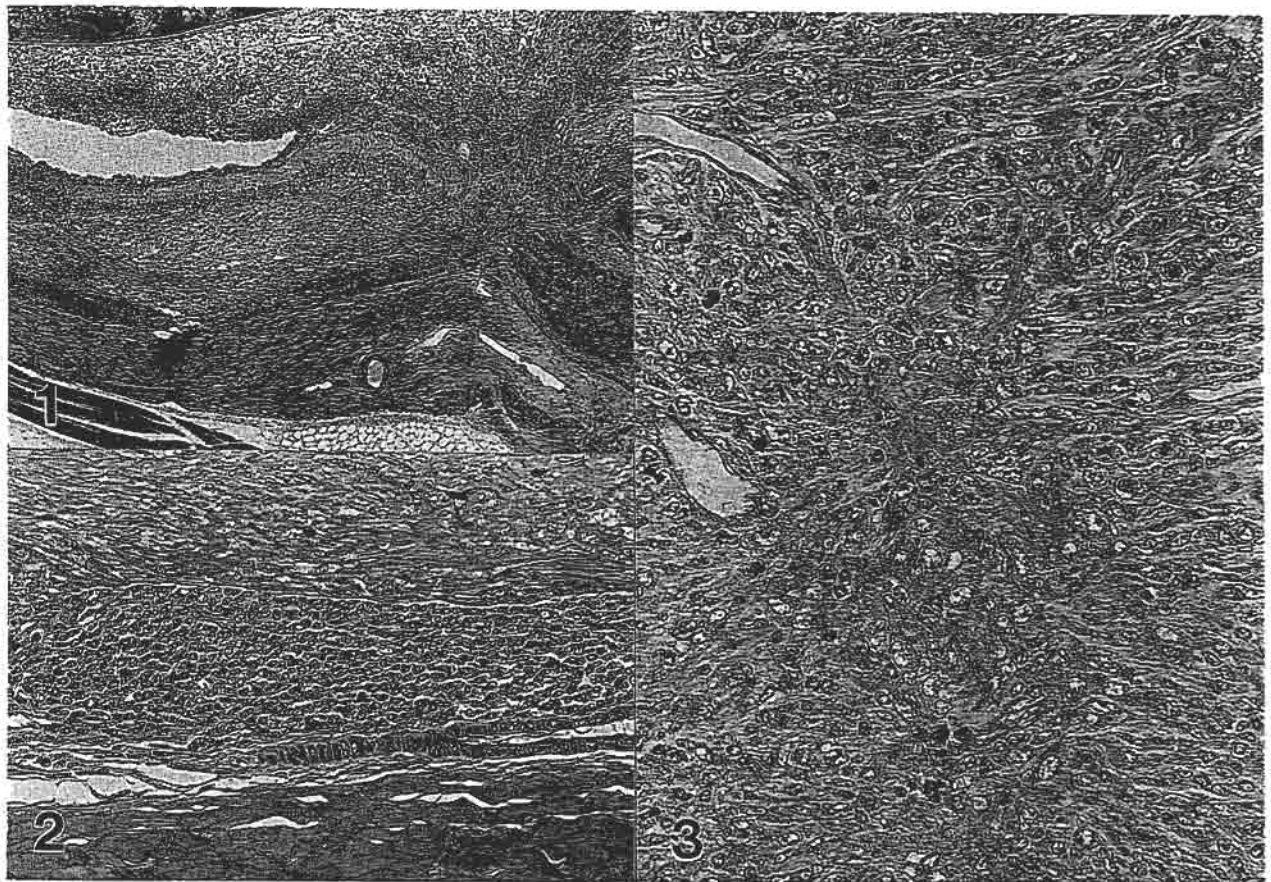


ラットの眼球

株式会社三菱化学安全科学研究所出題 第38回獣医病理学研修会標本No.729



動物：ラット (F344/DuCrj), 雄, 135週齢。

臨床事項等：背景データ蓄積のために長期に無処置で飼育した1例で, 135週齢時に計画殺した。剖検時に右側眼球の混濁が観察された。

組織所見：眼球病変は硝子体を置換し, 脈絡膜および網膜を巻き込む増殖巣であった(写真1, H E染色)。増殖巣は毛様体の一部を巻き込んでいたが, 虹彩は保たれていた。強膜から外側への浸潤はなかった。脈絡膜の位置にはクロマチンに富む小型円形核で胞体に乏しい細胞が密に集簇する領域があった(写真2, H E染色)。そのすぐ内側には核質淡明で長楕円形の核を持つ紡錘形細胞が豊富な膠原線維を伴って増殖し, また, この領域と残存網膜との間には膠原線維に乏しい紡錘形細胞の充実性増殖がみられた。このような領域の一部には花むしろ状を思わせる構造も認められた。さらにこれらの増殖領域は短紡錘形～類円形細胞の密な増殖領域と連続していた。この領域では, 核および細胞異型が目立ち, 分裂像も頻繁に観察された(写真3, H E染色)。水晶体に接する部分では新生血管や炎症性細胞とともに腫瘍細胞が単離も

しくは数個単位に集簇した像が観察された。この領域でも核異型を示す細胞が豊富に存在した。好銀線維はいずれの領域でも1～数個の腫瘍細胞を断続的に取り囲んでいた。免疫組織化学的には, 抗S-100蛋白抗体に対して紡錘形腫瘍細胞のみが, 抗vimentin抗体に対して大部分の腫瘍細胞が陽性を示した。 α -SMA, GFAP, ED-1は陰性であった。ダビドソン固定材料からの戻し電顕観察を試みたところ, 腫瘍細胞内にプレメラノゾームは観察されなかった。

考察および診断名：神経線維腫と神経鞘腫は厳密には異なる腫瘍だが, 悪性の場合に両者を区別することは困難であることが多い。このような場合, 悪性末梢神経鞘腫瘍との診断名が用いられることがあるが, 本症例はラットの現状における分類を鑑みて悪性神経鞘腫と診断した。黒色腫との鑑別は一般に電顕所見に頼らざるを得ないことが多い。本症例で観察される種々の組織像は悪性黒色腫の特徴を窺わせる面もあり, 今後両者の鑑別点, 分類上の取り扱いなどを検討, 再整理する必要があるかもしれない。